

谷川 俊太郎

聞き手・文 山本かずこ
撮影 岩切 等

「別れのかたち」は
あつた方がいいと思います。



詩人、谷川俊太郎は書いている。「私はただかっこいい言葉の蝶々を追っかけてただけの 世間知らずの子ども その三つ児の魂は 人を傷つけたことにも気づかぬほど無邪気なまま 百へとむかう」(「世間シラズ」より)

ただし、詩人といえども、言葉を食べ生きていけるわけではない。普通の人と同じような暮らしのなかで、親しい人たちの死とも向き合ってきたのである。

谷川さんがはじめて死について考えたのは、いつのことだろう。

「母が呆けたりしてから、老いや死について考えるようになりましたね」

母親の多喜子さんは、四年七カ月の入院生活の後、昭和五十九年に他界。その五年後の平成元年に父親で哲学者である徹三さんも亡くなっている。谷川さんは五十代であった。この日、通された部屋には亡くなられたご両親の写真が飾られている。お二人とも優しく微笑まれている。「僕はお墓よりも、こっちの方に二人はいるという感じがする時があります。いつも、見守ってくれているし、悪いことしたりすると、勘弁してくださいよ、ってちよつと話しかけたりすることはありますね。この写真は北軽井沢で写したのですが、写真というのは、残された者にとっては大事。だけど、うちの場合は残しすぎですよ(笑)。写真って、捨てにくいものですしね」

親しい友人たちも亡くなっていく。一人っ子である谷川さんにとって、喪失感

はかりしれないはずだが、谷川さんは、親しい人の死をどんなふうに乗り越えてきたのか。

「僕は割と現実に対応する人間なので、たとえば武満徹が死んだときも、失われたという感じよりも、彼がつくった歌を自分が歌えるようになることに喜びを感じたりするんです。武満が残した歌を歌っていると、彼が死んだというふうに思わなくていい、というふうに思える。それは魂のレベルの話に近いですよ。身体はもうない。けれども、彼が残したものは魂のレベルではずっとあるんじゃないか。武満さんがそばにいてくれる、みたいな感じは強くなりますね」

谷川さんは、武満徹さんの形見の品もよく身につけるといふ。

「特に彼の洋服を着ていると、身近もいところですよ。身体つきがよく似ていたから、すぐくまうくまういっちゃって(笑)、五、六着ももらったかしら。お気に入りもありですよ。森英恵の、ジーンズの生地で作った上下だとか、三宅一生の長袖のシャツとか。彼は結構衣装持ちだったんですね。着ていると、一緒にいるという、そういう感じはありますね」

今年七十二歳を迎えられる谷川さん。「お葬式というのは死んだ自分のためではなくて、残された他人のためだということ。がだんだんわかってきましたね」と言う。葬儀を遺族の人たちが内輪だけで行うと、後で知らされた弔問客が次から次へと

来てしまつて、かえって困る事態になるということもよく聞く話だ。

「僕は別に仏教徒ということではないんだけど、無宗教というのは落ち着かないのね。だいたいお葬式というのは亡くなった自分の友人とか身内とかを、仏様や神様によりしくお願いします、という感じだと思うんだけど、無宗教だと当人にさようなら言うだけの話になっちゃって、なんとも頼りないですよ。弔辞を読む方も、すごく馴れ馴れしくなるというのかな、変に日常的になつてしまう。一番典型的なパターンは、私もおつけそつちへ行くから待ってね、そつちで一杯飲もうね、というものだから(笑)、聞いていてね、しらけてきちゃうんです。そんな気軽に考えてほしくないみたいなの。

ある程度儀式になつていの方が、きれいだと思うんですね。どんな文化でも、お葬式というのは相当大事なもので、それぞれの文化によつてすごく楽しいものであったり、悲しいものであったり、厳粛なものであったりするわけだけど、その二つひとつに別れのかたちというものがあると思うんですよ」

「別れのかたち」があつた方が、残された人間が安心できるのではないのか、とも。谷川さんは場所としての墓地も好きで、特に海辺の墓地がいいと言う。

「ヴァレリーの詩にあるから言うんじゃないけど、函館の方だったかなあ、とてもロケーションのいい海辺の墓地があるんですね。



こういう所だったらいいなと思いますよ。

お墓は作った方がいいと思いますね。残された他人のためにけじめとしても。それに、そこに行けばその人と繋がることのできるみたいな気がするでしょう。それに、静けさがあって、周りがみんな死んだ人たちだから、なんとなく安心感がある。気持ち落ち着くという感じがありますね。外国の墓地に行くと、それぞれに形式も違うし、お墓に写真なんか貼り付けたものもある。その人の歴史を想像できておもしろいね」

ここまではご自分も含めて、あくまでも残された者の立場から話してください。たわけだが、一方、谷川さんご自身の死生観となると少々異なるようだ。

「僕自身は死んでからお墓にいるだろうって全然思わない、遍在しちゃうだろうから。だって魂ってそういうものだと思うているから。僕は超能力とかそういう能力はないので自分ではわからないけど、いろいろな本を読んでいると、いろいろな説があって、その中で自分が一番気に入った説を採用するのが一番いいんじゃないかと思っているのね。魂はぜったい死なない、という説なんです。そうになると、死というものはないと思います。身体は何回も入れ替わっているけど、魂がどこまでその記憶を持っているかもわからないけど、時々前世のこととか言うひともいますよね。それに、魂が常に人間という説もあるし、虫獣になることもあるという人もいます。そのところは

よくわからないけど」

谷川さん自身は生まれ変わったら今度は女性になりたい、と言う。

「西洋でも東洋でも、陰と陽とかプラスマイナスとか、全宇宙を二つの要素に還元する考え方ってあるでしょう。それは人間とか生命にとつては、オスとメスだと思いますね。それは単に身体の形態的な違いとか、機能の違いというだけではなくて、もっと深いものがあると思います。つまりユングなんかに言われている、いわゆる男性的原理とか女性的原理というのがありますよね。普通の意味合いの男の中にも女性的なものがあるし、女性の中にも男性的なものがあるという意味で、違う原理の存在になってみたいと思うんですね」

詩作の面でも、今にとどまらず、たえず新しい境地を開拓してきた谷川さん。お望みどおりに生まれ変わったら、今度は女性の視線から、素晴らしい詩を書いてみせてくれるのかもしれない。ぜひ、拝見してみたいものである。

谷川さんの死生観をうかがっていると、死は決して怖れるものではないと思えてくる。

「日本人というのは死と生とを敵対的にはとらえないでしょう。西洋の人というのは死というのは暴力だというふうに捉えていて、たとえばサルトルが死んだとき、ボーヴォワールが死というのは暴力だと言った時、僕はびっくりしました。そういう考



え方もあるのかと。我々日本人からすると、自然に還るとか土に還るとかずと連続している感じ方がある。僕の場合も小さいときからそうだったんですけど、自分が死んでも、土になつたりするんだという意識がずっとありましたね。年をとつてくると、実感として、ますますその思いが強くなつてくるという感じはあります」

誰でも親しい人との別れがいつか来る。そのとき、死を怖れないでいられたら、死んでいく者にとつても、残された者にとつても

どんなにか幸せなことだろう。谷川俊太郎さんが、企画から参加された、アンソロジー詩集『祝魂歌』（ミッドナイト・プレス）がこの夏刊行された。そこには、シェイクスピアなど、まさに古今東西の「魂の新しい旅立ちを祝う」詩篇が集められている。

「死は人生のダークサイドだつて思われがちですが、死の先に何かが開けていることを感じとつていただけたら嬉しいと思います」

詩には悲しみや不安を癒す力が確かにある。谷川さん自身の詩も収録されている。

「しぬまえにおじいさんのいったこと」

谷川俊太郎

（略）

わたしは むかしあなたをすきになつて
いまも すきだと

あのよで つむことのできる

いちばんきれいな はなを

あなたに ささげると

この詩の作者はもちろん谷川さんだが、旅立つてゆく男（たち）の言葉でもある。残された女（たち）の魂に、深く優しく届くはずである。選りすぐられた三十編の詩はそれぞれ、誰かの言葉であり、誰かの魂に届けられたがつている。

今も誰かの心に生きているかぎり、身体は消えてしまつても、その人は生きている。それを、感じるときの窓口というのがあるといいと思えたりする。天国の人に今日い

ちにちの、楽しいことや悲しいことを報告できる窓口。そうずっとずっと昔の人も考えた。それが、家の中の仏壇や神棚、お墓や法事として私たちの暮らしの中で続いているのだろう。

天国とつながっている。そう考えるだけで、今日いちにちが楽しいものになる。それは、代々日本人の生きる知恵でもあるはずだ。

谷川俊太郎さんの編で、この夏『祝魂歌』という魂を祝う詩のアンソロジーが刊行された。

「死は人生のダークサイドだつて思われがちですが、死の先に何かが開けていることを感じとつていただけたら嬉しいと思います。『祝魂歌』が香典返しや一周忌、七回忌などで、遺族の側からの御礼の印として使ってもらえたらという気持ちがあつて、手にとりやすいようにと版型の面でも考えてみました」

詩には悲しみや不安を癒す力が確かにある。



『祝魂歌』ミッドナイト・プレス発行

函入り・上製・A5変型（100×190ミリ）

定価 本体2700円＋税 谷川俊太郎編

／装画 フジ子・ヘミング

古今東西の優れた三十篇の詩を収録。「このささやかな詩集が、生者への慰め、死者へのはなむけとなることを念じています（谷川氏あとがきより）」